

渡谷利香作 「非行クラス」

男子A おい、次の時間、小川の授業だぜ。

男子B 気がめいるなあ。あいつの授業ってよ、全然面白くないし、第一、分からないんだよ、何言ってるのか。

男子A それでよ、ちょっと問題に答えられないと、すぐおれたちをバカだチョンだって驚倒^{げとう}するんだもんな。頭来ちやうぜ。

男子B 本当だよなあ。おい、ちょっと遊ばないか？

男子A 遊ぶって？

男子B 後ろの教室の戸はいつも内側から錠かかっているから問題ないとして…。前の戸をよ、2人で押して、小川のやつ、入れてやんねえのよ。

男子A ちょっと面白いな。やってみるか。幸い、うるさい委員長の柴田もいねえしよ。

効果音 (始業のチャイム。先生の足音)

男子B お、来たぜ来たぜ。

ナレーション 彼らは、しっかり押さえつけました。クラスの生徒も、別に止めるでもなく、彼らのやりたいようにさせています。先生は、1、2分、戸の前でガタガタやってましたが、やっとボイコットされたと悟ったのか、引き返してしまいました。

男子A おい、うまくいったな。

男子B ああ。(2人、笑う)

ナレーション 10分ぐらいたったあと、担任の先生が入ってきました。

担任 君たち、一体何をやったんだ？ 小川先生は大変怒っていらっしやっただぞ。どういことなのか説明してくれ。

一同 ……。

担任 小川先生は、「もう2Gでは授業をする必要性が見られないから、授業はしない」と言っている。それから、「今日は全員授業を拒否したとして、欠席にする」と言ってんだぞ。ああ、ちょっと、青木君、委員長の柴田が戻ったら、一緒に職員室まで来てくれ。

青木 はい。

効果音 (ドアが開き、担任出ていく。教室のガヤ)

男子A ちょっとヤバくなってきたな。

男子B ふん。しょうがないじゃん。

効果音 (「ガラ」と戸の開く音)

柴田浩行 みんな、聞いてくれ。小川先生は、もう今日は授業には来たくないそうだ。それで、全員欠席の件なんだけど、中には皆勤賞ねらったりして、まだ1回も休んでない人もいると思うんだ。それが、この1時間でおじゃんになっちゃうんだよ。「今まで無遅刻無欠勤でいたのが、一部の人の悪ふざけでダメになっちゃうなんて、かわいそうだ。彼らはそうするのに大変な努力をしたんだ」って言ったんだけど、先生は、「わたしは戸の前に2分ぐらいいいたんだ。授業受ける気があるなら、どうしてほかの者が、開けなかったんだ？」って言って譲らないんだ。それで、どうしたらいいか、みんな考えてほしいんだ。

効果音 (生徒ガヤ)

男子A　　ますますヤバくなってきちゃったぜ。

男子B　　ああ言われると責任感じるよな。

男子A　　だけだよ、小川のやつ、おれたちばかり責め立ててよ。自分がなんでボイコットされたか、全然考えてないじゃん。

男子B　　そうだよな。自分の非なんか全然分かつちやいないんだぜ。それで勝手に逆上しやがってよ。

男子A　　大体、あいつの授業の内容のひどさったらなんだ。“完全教科書コピー授業”じゃないか。

男子B　　授業のリズムはないし。ただしやべって黒板に書きゃいいと思ってのよかよ。

男子A　　あったま来るよなあ、本当に。

ナレーション　　結局、その日の事件の解決は、全員反省文を提出し、その授業は“全員遅刻”という処置に収まりました。ところが、それから数週間たって、また一つの事件が持ち上がったのです。聞いてください――。

　　今、2年G組の面々は、中間テストの準備に忙しいようです。

男子A　　おい、みんな、今度のテストどうする？

女子C　　そうなのよ。小川先生の授業は、聞いても分かんないのに、聞いてないから、もう全然ダメなのよ。

男子B　　おれもなんだ。

男子A　　おれ、もうカンニングするっきゃないと見たね。

女子C　　うん。わたしもやっちゃおうかな。

男子B　　そうだな。まともにやったって点数取れそうもないし。おれ、理数系行く気だから、古典なんて、どうやってもやる気でないもんな。

男子A　　ああ。

女子C　　やっちゃおうよ。あたしさ、就職するつもりだから、ヤバい点は取れないのよね。と言っても、勉強は好きじゃないし。要するに、卒業さえできればいいと思ってるのよね。

男子A　　多かれ少なかれ、そんなもんじゃない？

ナレーション　　彼らは、カンニング方法をいろいろ検討して、実行に移しました。

男子A　　おい、思った以上にうまくいったな。

男子B　　これからも、この調子でいこうぜ。

ナレーション　　彼らのカンニングの成功は、ロコミでクラス中に広がり――。

女子C　　ねえ、聞いた、橋本君たちのこと？

女子D　　うん。でもさ、ひどい話よね。わたしたちがなんで一生懸命勉強してるのか、分からなくなっちゃう。

女子C　　本当よね。あたし、やる気なくしたわ。

女子D　　ねえ、今度のテストで、わたしたちも、やっちゃわない？

ナレーション　　こんな具合に、カンニング参加者はクラス中に増え、次のテストでは、全員の4分の3ぐらいの人がやってしまいました。

　　ところが、今、喫茶店で話をしている2Gの生徒がいます。彼らは数少ないカンニング不参加組、委員長の柴田君と、副委員長の青木さんです。

青木　　全く頭に来るわねえ。

柴田　　ああ。

青木 もう勉強する気なくなるわ。わたしが睡眠不足をして苦労して取った点数を、あの人たちはカンニングで取るのよ。人の努力の結果をタダで盗むのよ！

柴田 本当にな。

青木 あの人たち、みんな、なんのために学校へ来るのかしら？ 勉強しないんだったら、来なきゃいいのよ！

柴田 そう興奮するなよ。おれは、君は偉いって思ってるんだぜ。こんなクラスの状態で、よくカンニングしないでいられるって。

青木 わたしは学校へ勉強しに来てるんだし、テストはわたし自身のためになるんだから、頑張ってるだけよ。わたしは、やりたいことがあるしね。勉強は、そのステップだって思ってるの。それに、あの人たちのような盗人根性^{ぬすっと}だけは持ちたくないと思って、半分意地張ってやってるんだけど、時に誘惑に負けそうになるわ。それより、柴田君だって、よくしないでいられるわね。

柴田 うん。いろいろ理由はあるけど、一番の理由は、おれ、クリスチャンなんだ。だから、神様の前でそんな罪を犯すことができないってことなんだ。

青木 ふーん。

柴田 おれも、昔はすごい荒れてたんだ。今でこそ委員長なんてやってるけど、これでも中学時代は番張ってたんだ。でも、すごくむなしくなって、教会を探し、それから間もなくイエス・キリストを信じて、クリスチャンになったんだ。

青木 へえー、神様って、すごい影響力があるのねえ。

柴田 とにかく、このままじゃいけないよ。みんな、その時さえよけりゃいいと思って、もっと先を全然考えてないんだ。無気力の象徴だよ。なんとかしなくちゃ。

青木 でも、どうしようもないんじゃない？ テストの数字でその人間の価値が、将来が決まってしまう。無気力にもなるわよ。なんのために学校へ来るか、把握してる人も少ないんじゃないの？

柴田 でも、おれ、明日、みんなに話してみるよ。

ナレーション そして、次の日のこと――。

柴田 みんな、ちょっと聞いてほしいんだ。みんなに考えてほしいんだ。なんで授業があり、テストがあり、そして学校があるのか。今のうちのクラスの状態は、みんな、そのことを忘れて、自分勝手に動いてしまってるんだ。

男子A うるさいなあ。それならそれでいいじゃないか。

柴田 それでは、学校へ来る価値がないじゃないか。来ないで、一人で適当にやればいーだろ。授業のボイコットや、カンニングするくらいなら、学校に来る必要ないだろ。

男子B 出席日数足りなきゃ大学行けねえじゃねえかよオ。

一同 (口々に) そうだよ！

柴田 待ってくれ！ 問題はそんなことじゃないんだ。なんて言うかな、もっと人間としての生き方の問題なんだ。僕たちは、この受験体制と呼ばれる学校生活の中で、何か大事なものを失いつつあるんじゃないかな。例えば、いいかい、いつかの小川先生ボイコットの一件でも、一部の人間のいたずらで、まじめにやってきた人たちが迷惑したろ？ そりゃ先生の中には気に食わない人もいるかもしれない。だけど、みんなが「こうしてほしい」という願いを持ってんだったら、どうして言わないんだ？ 今まで、僕たちが考えていること、願っていることを、

先生に一度だって真剣に言ったことがあったかい？（間）「そんなことやっても無駄だ」とばかり、てんからあきらめて、あんないたずらなんかで憂さ晴らしをする。そして、悪いのは皆他人だと決めつける。男らしくないぜ。汚いよ！カンニングだってそうだ。なんの努力もしないで、他人の血のにじむような努力の結晶を盗み取って、いい点取ったからってなんになるんだ？

ナレーション
柴田

真剣な柴田君の声に、皆は、失いかけていた良心のうずきを感じ始めていました。橋本、山田、1年の時、君たちが車イスの内田をおぶって、丹沢に登った心の優しさは、どこに行ったんだ？中山、遠藤、文化祭の文集を何日も徹夜してみんなで作り上げた、あの頑張りはどこへ行ったんだ？あの時は、小川先生がカンパして、肩たたいて喜んでくれたじゃないか！みんな、目覚ませよ。この辺で、自分を自分自身に取り戻すんだよ！

ナレーション

いつしか、柴田君の声は震えていました。いいえ、彼だけではありません。クラスの一人一人が、じっと唇をかみしめていたのです。“大切なものをもう一度取り戻そう”という決意を、うちに秘めながら――。

<完>